

佳作

「臼井さんの生き方」

四国中央市立土居小学校

5年 山内 藍紗

「転んでも大丈夫」

私は、本を手に取った時、転んだら痛いし、大丈夫じゃないよ思っただ。どうして転んでも大丈夫なんだろうか、題名に込められた思いを知りたいと思い、読んでみることにした。

臼井二美男さんは、足の不自由な人のために義足をつくる仕事をしている。朝早くから夜遅くまで、どんなに疲れている日でも義足をつくっている。足が不自由な人は、生まれつきの病気や、不運な事故で足を切断するなどして足を失っている。臼井さんは、その人たちに再び笑顔と生きていく力を、そんな熱い思いで義足を作っている。

義足を作ってもらった人は、臼井さんに感謝の気持ちでいっぱいだ。特に印象的だったのは、「先天性頰骨欠損症」という病気になり骨を切断した子どものことだ。義足を作ってもらったことで、大好きだったけど、あきらめていたサッカーができるようになる、以前のような笑顔をとりもどした。輝く笑顔だ。

がんで足を切断した女の人は、義足を作ってもらったことで、もう一度希望をもって目標に向かうことができ、パラリンピックに出場することができた。臼井さんの作る義足は、真つ黒な絶望という暗闇から差し込んだ一筋の光だと感じた。臼井さんのまっすぐな思いと、とことんがんばり抜く努力による光だ。

義足は、ベテランの人でも、その人にぴったり合うものを作るのは難しいそうだ。そのため、臼井さんは、できるだけ置きや草間の要望を聞き、その体と心にぴったり合うものを作

ろうと努力している。臼井さんの立ち上げた「ヘルスエンジェルズ」という練習会では、初めて走る人、たくさんの大会に出場している人など、義足をつけた様々な人が参加している。そして、走りなれた人たちが初めて義足をつけて走る人に走り方を教えてくれる。臼井さんの義足でつながっていくのだ。

私は、この本を読み終えて、もう一度「転んでも大丈夫」という本の題名について考えた。「大丈夫」という言葉は、臼井さんの、「転んでも大丈夫。安心して歩いてごらん。自分と義足を信じて走ってごらん。」というメッセージだと思った。

義足は、足の代わりになる道具というだけでなく、人を勇気づけて、前へ進むための大切な道具、そして新しい希望の足なのだと感じた。信念をもって義足をつくっている臼井さんの「大丈夫」という言葉は、温かくて大きな安心感を与える「まほうの言葉」なんだなと思った。

臼井さんの作る義足とその言葉に勇気をもたらした人たちは、自分の人生を前を向いて生きている。フアツションショーに出たり、走り幅跳びや走り高跳びに出たりしている人もいる。足を失ってあきらめかけていた人が、臼井さんの義足によって、立ち上がることができたのだ。私は今、やってみたいことがたくさんある。自分を信じて、できることからがんばっていきこうと思う。私は、この本から、臼井さんの生き方から勇気をもたらった。

受賞者の皆さま、
おめでとうございます!

ソラトくん



SOLATOは、
子どもたちの明るい未来を応援しています。



この星と人のチカラに。

SOLATO

太陽石油

検索

